『虞美人草』の女たち

日傘　順子

夏目漱石作『虞美人草』は、甲野藤尾(24 歳)、宗近糸子(22 歳)、井上小夜子(21 歳)という 3 人の女性と、甲野欽吾(藤尾の腹違いの兄)、宗近一(糸子の兄)、小野清三（井上家で世話になった）という 27,8 歳の青年たちの間で起こる結婚問題を描いた小説である。この中で漱石は、博士という「地位」ある男と結婚して生活の保証を望む女と、地位を得ることによって美貌と金銭という女の付加価値を手に入れようとする男を描き、『吾輩は猫である』以来追求してきた「真実の愛とは何か？」「結婚とは何か？」「女とはいかなる存在か？」を問いかける。そして「藤尾の死」によって高慢な女の小細工を消滅させ、そこで甲野欽吾に「人間の真実とは何か」という哲学を語らせる。

まずこの小説の主軸は藤尾と小野さんの結婚問題であるが、暗いところで生まれて、孤児であるという噂もある小野さんは、世の中の明るいところへ出るまでに 27 年かかった。その「明るさ」を安定させるために、自分をここまで援助してくれた貧しい井上孤堂の娘の小夜子とは結婚せずに、これから博士論文を書いて名誉の金時計を得て、美貌と財産を持つ藤尾と結婚しようと目論んでいる。一方藤尾は、博士候補の小野さんに沙翁(シェークスピア)の個人教授を頼み、美貌と財産の上に「社会が求める良妻賢母教育」を付加して「地位ある夫を手に入れる」完璧な女になるための一石二鳥計画を推進中である。

甲野藤尾は（もし男女均等教育社会であったとしても）単なる上辺だけの教養しか身に着けず、自分の美貌と金銭を武器に男を繰ろうとする女である。藤尾が「柘榴石(カーネット)の飾りのついた金時計」をちらつかせる行為は「私は金時計(博士号)と共にある」即ち博士でなければ結婚しないという意味であり、彼女は付属物の価値と自分の価値を混同して(この時代の)婚期を逃した文明病の象徴のような傲慢で哀れな勘違い女である。

井上小夜子は、美貌でいえば、宗近が京都で見かけた琴を弾く女で「藤尾より悪いが糸子より良い」という平均的器量の持ち主だろう。確かな約束はないものの、親の言いつけを守り、状況から自然と小野さんと結ばれることを夢見ている「待つ女」である。特別な教養もなく夫に従う依存型の平凡な女である。

そして宗近糸子であるが、彼女は上記のとおり、二人と比べれば器量が劣っている。しかし男のための手仕事を自分の領分としてこなす、精神的には自立した存在である。家庭では「夫に従う・支える」両方の働きが期待できる女である。

漱石は 3 人の女性に「器量によって変わる自覚」を表した。そして容貌に連動して形成される性格の上に年齢を加味して「若い女は毒されていないという精神の処女性」を表現した。それを「女の経時変化」で表すと、自分を持たない 21 歳の小夜子は「親がかりの娘」の、自分の領分を自覚する 22 歳の糸子は「恋人を持った女」の、付属物に頼る 24 歳の藤尾は「妻」の象徴にも見える。3 人の女は 1 人の女の変化でもある。

そして漱石は「自分の真実」に従った糸子と小夜子に思い通りの結婚を与え、真実を曲げた藤尾を葬った。藤尾の亡骸は全ての欲望とそれに伴う苦悩が消えて本来の美しさを取り戻した。藤尾は死んでようやく「真実の人間」になれた。明治の男・漱石は、新しい男たちを「女の策略」から逃れさせ「間違った妻の選択」をさせなかった。3 人の女たちは時代を問わない女の基本パターンとして参考になるだろう。(2012.5.26)